中国が嫌われる7つの理由

その2

侵略（しんりゃく）

NO CHINA

繰り返される虐殺！ 伝統・文化を徹底破壊!!

南モンゴルへの弾圧は今日も続いている

INTERVIEW

オルホノド・ダイチン氏

1911年から1949年の間に渡って独立運動を行うも「内モンゴル自治区」という名で中国に侵略された形になっている南モンゴル。現在も人々への弾圧や虐殺、そして草原など同国の環境破壊が続いている。繰り返されている中国の横暴について、同国出身の独立運動家であるオルホノド・ダイチン氏が語る。

写真提供●モンゴル自由連盟党
執筆●仙波 晃

習 近平政権発足後も変わらぬ弾圧

習 近平政権が発足して半年以上が経過した。政権が変わる度に、中国の体質が変わらないかと淡い期待を抱く者もいるが、誰が指導者になったところで、中国という国の体質は何も変わらないのが現状である。当然、中国からの弾圧に苦しむ南モンゴルにおいても、悪い変化こそあっても、良い変化は一切ないとダイチン氏は言う。

「今も相変わらず南モンゴルの牧草地は中国人によって破壊され続け、モンゴル人は酷い扱いを受けています」

現在、中国は「西部大開発」と銘打った政策の下、南モンゴルの開発をどんどん進めている。賄賂を渡すことで地元政府を傀儡とし、牧草地に住む牧畜民に圧力をかけて、次から次へと追い出し、石炭を掘り起こすなどの開発を進めていた。

「開拓は南モンゴルの東から西まで、全域に渡って行われています。それによってモンゴル人は住む所を失っているのが現状です。いきなり自分の住んでいる土地のすぐそばで土を掘り起こしたり、工場を建てたりするものだから、牧畜民も引っ越すしかないんです」

土地を奪われた牧畜民は、市街地へと移住することを余儀なくされるのだが、そこは完全に中国人の街になっている。かつてモンゴル人の国であった南モンゴルも、次から次へと中国人が移住してきたことによって、今は少数民族になってしまった。

「彼らの侵略は一般人を南モンゴルへ移住させることから始まりました」とダイチン氏は話す。

次から次へと押し寄せる中国人によって、いつしか街は中国人で溢れ、気がつけば中国人が国家の多勢を占めるようになる。そうなると必然的にモンゴル人は隅に追いやられてしまうのだ。

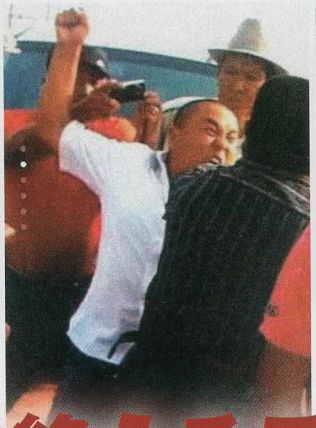
「だから牧草地を追われた牧畜民は、市街地の生活には馴染めない。自分の国でありながら、完全に居場所がない状態になってしまうのです」

オルホノド・ダイチン氏 モンゴル自由連盟党
南モンゴル出身の独立運動家。2000年に来日。2006年にモンゴル自由連盟党を結成し、党首に就任。中国に弾圧される南モンゴルの実状を世界に訴えている。

▲2013年5月17日、100人以上の中国人がモンゴル人牧畜民を襲撃。10人以上の負傷者が出た。

▲2013年4月27日、中国人がモンゴル人に暴行を加える。怪我をさせても、加害者である中国人が罰せられることはない。だからこのような事件が何度も繰り返される。

▲モンゴル人を撲殺した殺人犯の姿。動揺した表情すら浮かべていない。



◀土地を占有しようとする中国人のモンゴル人に対する暴行事件は絶えない。

◀オルドス市で、草原の土地を不法に占有されたことに抗議をした牧畜民は、殺害されてしまった。

暴行事件は絶えることがない

中国人はやりたい放題だがモンゴル人は抗議もできない

南モンゴルにおける開発にあたって、中国人や開発業者は、いきなり牧畜民のところに乗り込んできて、土地の占有を主張するという。しかしこのような横暴を前に、牧畜民が抗議をすることは危険を伴う。もし抗議をしたならば、一度は引き下がる。しかしすぐにたくさんの仲間、或いは中国人ヤクザをつれて戻ってくる。そして牧畜民に脅しを掛けるのだ。この脅しに屈しないと大変な目に遭ってしまう。

「やってきたヤクザはまずは家畜を殺すんです。そうすることで〝俺の言うことを聞かないと痛い目に遭うぞ〟とアピールするんですね。しかしそれでも抗議を続けると、今度は集団でリンチにされたり、酷い時には殺されてしまうんです。今、南モンゴルではそんな事件ばかりが起きています」

しかし、牧畜民が殺されたとしても、中国人には何のお咎めもないという。モンゴル人を完全に2級市民のように扱うこの現状に、ダイチン氏は憤る。

「牧畜民がムリヤリ土地を奪われたり、家畜という財産を奪われたり、殴られて怪我を負ったり、或いは殺害されたりしても、警察は加害者を捕まえようとはしないんです。例え目の前に殺人犯がいたとしても、警察は何もしてくれない。完全に中国側についている状態なんですね。だから酷い警察官になると、中国人と一緒になって責めてくることすらあるから、もうどうしようもないんです」

医学学校の校長先生に理由なき懲役3年!!

南モンゴルの学校では中国語教育を強制されている。しかし写真の医学学校の校長先生は、モンゴル語での教育に熱心に取り組んでいたため、中国警察によって家族共々逮捕されてしまった。校長先生は懲役3年の刑に処されたという。

校長はモンゴル国で難民申請中だったにも関わらず拘束されてしまった。

▶かつて中国は南モンゴルの草原の砂漠化を放牧のせいにしていたが、中国による強引な開発によって、環境破壊が進んでしまったというのが真実である。

中国の開発によって牧草地の破壊が進む

▲強引な手法で牧畜民を追い出し、勝手に道を敷き、石炭を掘り起こす……このようにして壊されていく草原の姿。緑豊かだった南モンゴルの牧草は減少している。

▲石炭を運ぶトラック。中には道路を走らず、草原を突っ切っていくこともあり、徐々に草原が駄目になってしまうのだ。

まるで無法地帯のようだが、実際はそうではなく、モンゴル人にとってのみ一方的に厳しい状況だ。相手の横暴に対してやり返そうものなら、警察はすぐに取り押さえ、「反国家分子」「分裂主義者」という名目の下、逮捕するという。つまり中国人の横暴は許されるが、モンゴル人の反撃は一切許されない状態なのだ。

２０１３年８月17日には、オルドス市において、開拓業者に抗議をした牧畜民がその場で殺されるという事件が起きた。しかしこの事件の処理も酷かったという。

「殺した中国人は、何のペナルティを受けることもなく、中国政府は被害者遺族、さらに被害者の村の人々に〝口止め料〟として２００万人民元（約３２００万円）を渡して、事件は完全になかったことされてしまったそうです」

ありえないこと、あってはならないことが、今現在も続いているのが、南モンゴルなのである。

強化される言論封殺で闇に葬られる事件の数々

「事件は毎日のように起きている。しかしそのほとんどは政府によって封じ込められてしまっている」と語るダイチン氏は、その理由の1つに〝言論封殺〟を挙げた。習近平政権が誕生してから、その傾向が以前にも増して強くなったという。

「アラブの春」に代表されるような、インターネットを発端に巻き起こる反政府運動への対策なのか、最近、中国ではネットの監視を強化するための新しい法律が設けられたという。

その法律とは、1つのホームページが５０００回閲覧されたら、或いは５００回転載されたら、そのホームページは中国共産党に対する〝誹謗・中傷のホームページ〟と認定され、閉鎖されるというものだ。例えそれが反政府のホームページではなかったとしても適用される場合はある。

「まるで文化大革命の時のような言論封殺です。当然、南モンゴルでも適用されているので、この法律ができてから50人以上のモンゴル人が逮捕されました」

文化大革命の時と違い、今の世の中にはインターネッ

侵略された後ではすべてが手遅れに

トがある。だから世界で何が起きているのか、真実を知りやすい時代になった。中国の横暴は、日本でも知られつつある。しかしそれは他民族を弾圧している中国の全貌ではない。ほんの一部なのだ。大半は政府によって徹底的に隠されている。そして政府はこう発表するのである。

「内モンゴル自治区では何の問題も起きていない」

▲中国は開発のため、牧畜民を次から次へと牧草地から追い出し、都市部に移住させる政策を採っている。今後もっと増加させるという。

土地を奪われた牧畜民の生活

▲勝手に敷いた道路を走る中国人ドライバーは、牧畜民の財産である家畜をどんどん轢き殺してしまう。土地だけでなく、財産、人権、すべてを奪っていくのが中国のやり方である。

中国と対峙するためには日本の覚悟が必要

「侵略された後で気がついても遅いんです。侵略される前にしっかり防がないと……」とダイチン氏は語る。日本にその対策ができていると言えるのだろうか。

「国民1人ひとりがもっと危機意識を持たないと、尖閣が奪われ、沖縄が奪われ、北海道が奪われ……日本そのものがなくなってしまうかもしれない。それでは今の私たちと同じようになってしまう。でもその時になって〝日本を返せ！〟と叫んだって、もう取り戻すのは難しい。日本は返ってこない」

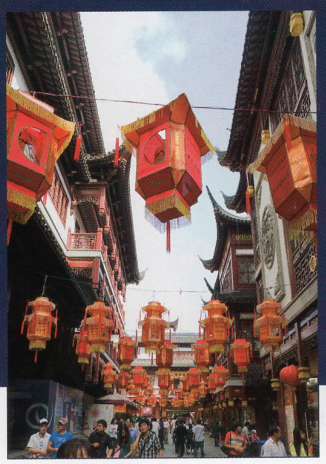
幸いにして、日本は安倍政権が誕生した。首相は中国の危険性を熟知した上で、外交を重ねている。そんな政権を支えることこそ、国民がまずすべきことだとダイチン氏は語る。

今、日本の覚悟が求められている！

民族浄化の象徴的事件

中国の中秋節を南モンゴルで祭日にするよう強制！

中国の伝統である中秋節を祝日にするよう南モンゴルに要請している。中秋節には歴史的背景があり、その由来は元の時代まで遡る。元の支配下にあった漢人たちが「モンゴル人を殺せ」と書いた紙を月餅の中に隠して配り、中秋節に反乱を起こし、結果的に元を倒した。その精神を受け継いでいるのが中秋節であり、中国人は今でもこの日を祝う。しかしモンゴル人にとっての中秋節は〝悲劇〟であり、祝日にするなどとんでもない話なのだ。



◀月餅を食べながら十五夜の月を鑑賞し祝うのは中国の伝統。

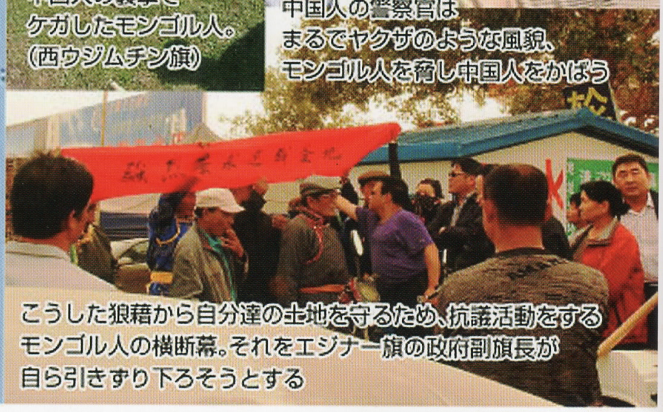
中国政府はモンゴル人の住む地域に大量の中国人を移住させ、もともと住んでいたモンゴル人が「二級市民」のような扱い

オンニュウデ旗でモンゴル人の村を襲撃する中国人

「北方の異民族を防ぐ」万里の長城からはるかに北側まで領土にしてしまった中国

中国人の襲撃でケガしたモンゴル人。(西ウジムチン旗)

中国人の警察官はまるでヤクザのような風貌、モンゴル人を脅し中国人をかばう



こうした狼藉から自分達の土地を守るため、抗議活動をするモンゴル人の横断幕。それをエジナー旗の政府副旗長が自ら引きずり下ろそうとする

「南モンゴル民主連盟」会長のハダ氏は95年12月に逮捕され、「国家分裂罪」、「スパイ」などの罪状で懲役15年を言い渡された。2010年12月10日、国際人権デーに釈放されるはずだったが、いまだに行方不明である。

モンゴル人作家ホーチンフ女史は、上記のハダ氏について「釈放される日に迎えに行くべき」とミニブログに書いたところ、2年以上自宅、ホテルなどで軟禁された。軟禁中に警察の暴行を受けた後の写真。

環境保護活動家のメルゲン氏は、草原を荒らす中国人のトラックに轢き殺された。「臭いモンゴル人の命なんて4万元(40万元説あり)にしかならない」という犯人の発言が大きな怒りを呼び、大規模な抗議活動につながった。

今やほとんどの学校は中国語教育である。モンゴル語の小中学校は次々に合併、廃校が進められた。そんな中でも「チベット・モンゴル医学学校」の校長は精力的に教育に取り組んでいたが、当局が強引に逮捕。身の危険を感じモンゴル国に亡命、国連難民高等事務局に難民申請中だったにもかかわらず、中国の警察がモンゴル国まで赴き校長ら家族三人を逮捕したのである。校長は懲役三年となった。

FREE SOUTHERN MONGOLIA

南モンゴルに自由を！

アジアで最も民主的な国家である日本の皆様、モンゴル民族にご支援を——

晋遊舎ムック
だから中国・韓国は嫌われる
2013年12月1日発行

■編集
仙波 晃

■執筆
菊橋みかん
桜海老じゃこ
仙波 晃
団 不発

■アートディレクション
表紙・本文デザイン
まなべゆたか

■本文デザイン
CountEye

■撮影
清田考広
斉藤 一
浜田泰介
MASTER FUJIYAMA
宮里昌志

■写真協力
アフロ
共同通信社

■発行人
伊藤 淳

■編集人
青山卓弥

■発行所
株式会社 晋遊舎
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-12
TEL 03-3518-6861（営業・広告）
TEL 03-3518-4541（編集）

■印刷所
三共グラフィック株式会社
©SHINYUSHA 2013 Printed in Japan

寄稿
古谷経衡
三品 純
森 鷹久

取材協力
イリハム・マハムティ
小山和伸
オルホノド・ダイチン
KAZUYA
黄 文雄
小坂英二
佐藤和夫
田母神俊雄
トニー・マラーノ（テキサス親父）
西村幸祐
萩生田光一
坂東忠信
茂木弘道

SPECIAL THANKS!
テキサス親父日本事務局
米国ケンタッキー州大佐　藤木俊一（Colonel Shun）

※敬称略、五十音順

絶賛発売中！
【歴史探訪シリーズ別冊】
マスコミが絶対教えてくれない
中国・韓国・北朝鮮
晋遊舎ムック　定価838円+税

●在庫のお問い合わせ
〒101-0051　東京都千代田区神田神保町1-12
株式会社晋遊舎　営業部
TEL 03-3518-6861

落丁・乱丁は小社負担にてお取替えいたします。

編集部では誌面の内容に関する電話対応をしておりません。
内容に関するお問い合わせは下記のメールアドレスまでお願いいたします。
book@shinyusha.co.jp
なお、お問い合わせの内容によっては、お答えできない場合や、お返事に時間がかかる場合があります。あらかじめご了承ください。